

もう何年も前になる。旅行会社のツアーに参加してタイ北部の古都・チェンマイを訪れたことがある。首都バンコクの北720キロに位置するタイ第2の都市で、「北方のバラ」とも称され、町並みも清楚で落ち着いた美しい街で、日本でいえば、京都や金沢といったところと聞いていた。以前に行ったバンコクは、「クルンテープ（天使の都）」と呼ばれているが、その人と車の喧騒に辟易していた私は、この都市に残る古き良き時代のタイに触れてみたかったからである。

総勢20名ほどで、夫婦ずれが3分の2、後はおばちゃん世代が多かった。マイクロバスが市内観光に出発する前に日本人ガイドが皆さんに相談したいことがあるという。

「今、チェンマイ大学で日本語を勉強しているという学生が来ていて、こんなに多くの日本人を見るのは初めてで、勉強のためにこのバスに乗せてもらえないかということですが、どう致しましょうか」ということだった。車内では「いいよ。いいよ」という声と共に大きな拍手も起こった。

やがて小柄な女の子が乗ってきた。両手を胸の前で軽く合わせて合掌し、「ワタシ〇〇トイマス。ニホンミナサン、アリガトデス。ヨロシクオネガイデス。ベンキョウシマス」とたどたどしい日本語で挨拶した。とても緊張している様子だが、その仕草がとても可愛かった。車内の大きな拍手に緊張がとけたのか、自然な笑みが浮かんだ。ここは「微笑みの国」、素晴らしい笑顔だ。この言葉は国が観光政策のために創り出したキャッチフレーズとも言われているが、そんなことはどうでもよかった。今の彼女の顔には人間の心からの安らぎの笑みが浮かんでいた。

席ごとに両手を合わせ、頭を下げる「ワイイ」というタイ式のお辞儀を繰り返し、通路を隔てて空いていた私の隣の席に腰を下ろした。

白いブラウスに薄い紺色のスカートはとても清楚な感じで好感がもてたが、ブラウスの襟や袖口にはほころびが、紺のスカートは色あせていた。やがて小さなバッグからノートとちびた鉛筆を取り出し、ガイドの話や日本人の会話をメモしているようだった。ちらちらと盗み見したが、タイ語と日本語が交ざっていて私にははっきりと読みとれなかった。

バスが動き出すと、前の席にいたおばちゃんが彼女の隣の席に移ってきた。

「お父さんやお母さんは元気なの。兄弟は何人。どうして日本語を勉強するようにしたの」

と矢継ぎ早に問いかけるが、答がちぐはぐで、おばちゃんの日本語があまり理解できていない様子だった。

途中、最も大きく格式の高いワット・チェンマンや白いバゴダで有名なワットプラシン、それに旧市街の中央にあり、”市の柱”を祭るワット・チェディルアンなどを巡ったはずなのに、あまり記憶に残っていない。隣の二人の会話が気になって仕方がなかったからである。

中心市街地に近いところで小休止となり、自由行動ということそれぞれが街に散っていった。街中にはかすかに煙が漂っていたが、この時期、タイは冬の乾季にあたり、昨日、近くの山で火事があったということだった。

この地域は、中国雲南地方から南下してきた民族やインドシナ半島を西に進んできた民族、それにチベット・ミャンマー系の諸民族も多く住み、民族的にも文化的にも多種多様で興味深いところだと聞いていたが、今では混血も進み、民族的な争いは殆んどないという。同じ黄色人種ということもあって、街中ではその民族の違いを感じることはなかった。

ぶらぶらしてバザールの屋台のような店で焼きバナナを食べてみたが、馴染めない味だった。少し早めにバスに戻り、ガイドブックで明日のスケジュールを確かめていたら、

「ただいま」といって彼女とおばちゃんが帰ってきた。少し大きめの紙包みを大事そうに小脇に抱えた彼女に「日本のおばちゃん」と化した集団が、「何買ったの」と取り巻くように集まってきた。「見せて、見せて」とせかすが、彼女は緊張した面持ちでかたくなに包みから手を離そうとはしなかった。

そばのおばちゃんが小さく頷き、「いいよ」というように目で合図を送った。彼女が包みから取り出したのは、若い女の子が着るようなブラウスとスカートだった。おばちゃん連中が代わる代わる彼女の胸や腰に当てて、「よく似合う。可愛い」を連発し、車内は彼女のファッションショウと化した。

ガイドから促されて皆がそれぞれの席に戻り、ようやくバスが動き出した。隣のおばちゃんが小声で私に話しかけてきた。

「この服は私が買ってあげたの。この子はとても賢い。どうしても日本に留学させたいのです。日本に来た時の連絡先として、私の住所と電話番号をメモして渡したのだけど、ひとりだけではね」と私に同意を求めた。私も喜んで連絡先を書いて渡した。もうひとり、おばちゃんの友だちもメモをしたためていた。

「ワタシ、ニホンダイスキ。ニホンイキタイデス。ベンキョウデス」その真剣な眼差しが、

可愛い決意のほどを示していた。私は日本から持参していた「エリアガイド・タイの旅」を渡した。

バスはターミナルと思われるところで止まり、彼女はここで降りることになった。席ごと「ワイイ」を繰り返しながら、前に立った彼女に、「日本にお出でよ」、「絶対よ」、「心配いらんからね」といった声が飛んだ。彼女の目には涙があふれ、やがてほほを伝ってブラウスの胸を濡らした。

「コックンマーカー（今日はありがとう）。サワディカー（さようなら）」と思わずタイ語が出た。

バスが動き出すと、左手に紙包みをしっかりと抱え、右手で大きく手を振った。車内でも憶えたてのタイ語で、「サワディ・カー、サワディ・カー」と皆が両手で応えた。やがて車窓から彼女の姿が消えた。

帰国してから何年か過ぎたが、彼女からもおばちゃんからも何の連絡もなかった。

現在、日本とタイとの友好関係は深く緊密で、その役割の中核をなしているのは元日本留学生で、その存在は大きく、大学・日系企業・政府関係機関などで要職について活躍している人が多いという。

私は、彼女がその中のひとりとして日・タイの友好に寄与していることを信じている。